

LEADERS NOW!

記録と優勝目指して 跳び続ける

全日本学生陸上競技チャンピオンシップ
女子三段跳び・走り高跳びで優勝!

- 社会学部1年次生 山根 愛以 さん
- 社会学部1年次生 三村 有希 さん

体育会陸上競技部が、2007年全日本学生陸上競技チャンピオンシップの2種目で優勝した。女子三段跳びで山根愛以さんが、女子走り高跳びで三村有希さんが、それぞれ首位の栄冠に輝いた。二人ともこれから一層の飛躍が期待される1年次生。さらに上の記録を目指して練習に励んでいる二人に登場してもらおう。

昨年9月に神奈川県平塚市総合公園平塚競技場で開催された2007年全日本学生陸上競技チャンピオンシップで、山根愛以さんと三村有希さんがトップに躍り出た。山根愛以さんは女子三段跳びで12メートル97センチ、三村有希さんは女子走り高跳びで1メートル76センチの記録だった。

これまでのベスト記録は、山根さんが参考記録で12.97、公認記録では12.52、三村さんが1.80。今回、二人はベストとそれに近い記録で優勝したことになるが、これは本人たちも全く予想外だったようだ。実は二人とも世界陸上大阪大会の補助員として、進行をサポートする役に就いていたので、試合に備えた練習がほとんどできていなかった。そのため、続いて出場する西日本インカレに向けての調整のつもりで臨んだという。

「当日は台風が過ぎた直後で、強風のために助走のタイミングが合わなくて、他の強い選手は苦勞していたのですが、私はいつも踏切板の手前から飛ぶ癖があるのでちょうど足が合ったのです」と山根さんは謙遜し、「風に乗って跳んだ感じだった」という。

しかし、風に乗じて勝つのも実力のうちであり、日ごろの練習がものをいった結果だ。山根さんは中学1年から陸上競技を始め、三段跳びは高校2年から。三村さんは小学4年から走り高跳びを続けており、高校2年の時に全国インターハイで優勝、3年の時に国体で優勝の経験がある。



女子走り高跳び・三村有希選手
(写真提供: 関大スポーツ編集部)

これからも優勝のプレッシャーと闘い、練習と競技を重ねて記録を伸ばしていくであろう二人に、自分の強みや目標などを語ってもらった。



山根 愛以—やまね めい
■1988(昭和63)年、東京都生まれ。兵庫県園田学園高等学校卒業。社会学部1年次生、体育会陸上競技部所属。



三村 有希—みむら ゆき
■1988(昭和63)年、大阪府生まれ。大阪府太成学院大学高等学校卒業。社会学部1年次生、体育会陸上競技部所属。

山根 練習すればするほど記録がついてきます。あまり人と争うのは好きではないのですが、めちゃ勝ちたいと思っていた人に勝てたときは何とも言えない気分です。私の場合は気持ち次第で、テンションが上がっていれば良い記録が出ます。音楽が好きなので、試合に臨む際に気に入った曲を聴いてテンションを上げるようにしています。今年から日本選手権に出られるので、一つでも上の順位に行けるよう頑張りたい。出るからには14メートルを超えて日本記録を目指します。

三村 私は体が柔らかく、身体的に柔軟性があるから、普通の人だったら飛べない位置から飛べます。競技時間が2時間ほどになることもありますが、常に自分のペースを維持していきたい。大学では走りに力を入れてきた結果、走力は伸びたものの、それがうまく跳躍につながらず、この1年間記録は伸びていません。去年は全カレ(日本学生陸上競技対校選手権大会)で優勝できませんでした。今年はベストの記録を出して、優勝を狙い、2009年ベオグラードで開催されるユニバーシアード大会を目指します。

能は『観る』のではなく『感じる』

ビジネス街で能の面白さを発見!
「30年～40年後に花開かせるために」

- 財団法人山本能楽会 理事長
山本 章弘 さん —文学部 1983年卒業—

大阪市中央区のビジネス街にある山本能楽堂は、国の登録有形文化財に指定されている。戦火で焼失した初代能楽堂を1950年に再建したもので、木造3階建ての中に切り妻造り檜皮葺きの屋根をもつ伝統的な能舞台が広がっている。財団法人山本能楽会理事長の山本章弘さんは、日本の代表的な伝統芸能の気鋭の担い手として、能の将来を見据えて果敢な活動を展開している。



「関大の学生時代、能楽部の顧問は学長を5期務められた大西昭男先生で、ご自身でも能管(笛)をお吹きになりました。卒業してからもお世話になり、能の発表会のあいさつ文に、山本能楽堂はビジネス街にある杜の祠であり、ここを大事にして、ここで舞うことにプライドを持ってしっかりやりなさい、とありがたい一文を寄せてくださいました」

山本能楽堂は、山本さんの祖父、初代博之氏によって1927(昭和2)年に創立され、80年を超える歴史がある。伯父の山本勝一氏が関西大学予科の出身で、能楽部の学生を指導していた。現在は山本さんが指導に当たり、内弟子にも関大出身者がいる。

日本独自の舞台芸術である能は、舞、謡、囃子で構成された一種の音楽劇。作品の多くは、死者が亡霊となって登場し、無念の思いを語る夢幻能のかたちをとっている。死んでも死にきれない胸の底を、行きあわせた旅の僧などに語る。語ることによって、遂げられなかった思いが晴れていくかのようだ。その無念さや孤独な心に共感することができれば、能は大きな感動を呼ぶ。しかし、ストーリーの展開も人の目を引く劇的な動きもない。ワキと呼ばれる聞き手は、ほとんど座って聞いているだけだ。

「日本人でありながら能を観たことのない人が多すぎます。また、能の第一印象を聞くと、退屈だ、眠たい、何を言っているのか分からないという答えが返ってきます。どこでご覧になりましたかと尋ねると、多くはテレビの教育番組。あれは私でも面白くありません。能は観ることによって、どんどんセンスが



山本 章弘—やまもと あきひろ
■1960(昭和35)年、大阪府生まれ。83年関西大学文学部国文学科卒業。3歳で初舞台。父山本真義に師事し、大学卒業と同時に故25世宗家観世清和に入門。5年の内弟子修業を経て独立。現在、26世宗家観世清和に師事。観世流能楽師準職分。能楽協会大阪支部常議員、重要無形文化財総合指定。観世宗家直門の能の正統を伝えるとともに、初心者向けの夜の公演「とくい能」、「上方伝統芸能ナイト」、気軽な入門講座「まっちゃまサロン」を開催。ホームページは、<http://www.noh-theater.com/>

磨かれていく。残念なことに、テレビ全盛の現代は、感性がくすぶってしまっています。能を<観る>のではなく<感じる>方向で、高いと思われがちな敷居をなくし、こちらへ上がってきていただけるような環境づくりをしないとイケないと思います」

そのため、山本さんは年6回の定期公演「たにまち能」をはじめ、仕事帰りに気軽に寄れる時間帯に、所在地の町名である「徳井町」を冠した「とくい能」を開催。また能と同時に、狂言、文楽、落語、上方舞などをダイジェストで上演する「上方伝統芸能ナイト」を催している。さらに、初心者のための入門講座「まっちゃまサロン」やホテルのロビーで能に親しむライブなども開いている。

毎年、大阪府立天王寺高校で開催している鑑賞会では、能面を見せて解説している。「能面は無表情ではなく、少し向きを変えただけで悲しく見える。手の動きと相まって泣いていることになり、外国人でも見たらすぐに分かる。日本人だけが分からないのはなぜか。それは言葉が理解できないと分からないと思うからで、例えば、悲しい仕草のときの声は低い、上を向いて喜んでいるときの声は朗々と高い。日本語が分からなくても、うれしい場面か悲しい場面か、聴いているだけで分かる。感性で観て感じてほしい」

山本さんは小学校でも、総合学習の時間に能を指導している。「私がやろうとしているのは30年後、40年後に花開くことです。650年、連続と続いてきた能楽の、その歴史の一部を自分が担わせていただいていることが何よりの誇りであり、喜びであると同時に、先の世代にもより魅力的であるように継承していかないとイケないことに、強い責任を感じています」